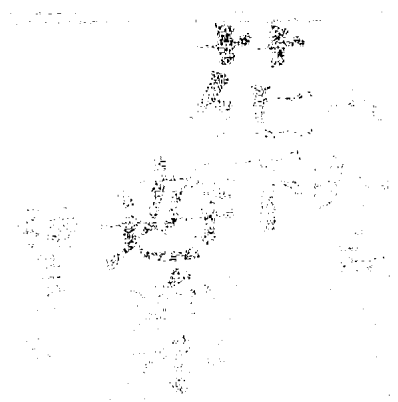




花下遊樂

中野孝次

彌生書房



中野孝次（なかの こうじ）

1925年、千葉県に生れる。東京大学独文科卒業。著書、『麦熟るる日に』（河出書房新社）『はみだした明日』『夜の電話』（文藝春秋）『ブリューゲルへの旅』『実朝考』（河出書房新社）『碧落に遊ぶ』（彌生書房）『自分らしく生きる』（講談社）『ハラスのいた日々』『生きたしるし』（文藝春秋）『ひとり遊び』（朝日新聞社）『清貧の思想』（草思社）ほか。

©1993

花下遊樂（新装版）

1993年4月10日 初版印刷

1993年4月20日 初版発行

著者 中野孝次

発行者 津曲篤子

発行所 株式会社 彌生書房

東京都新宿区中町18 電話・東京(3260)3707(代表)

太陽印刷工業株式会社 / 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

落丁・乱丁本はお取替え致します

ISBN4-8415-0671-3 C0095

目次

I

桜

6

II

山小屋の冬

30

野辺の送り

34

犬の散歩

38

西瓜の味

42

勤勉各態

46

ローテンブルクの女性たち

50

昭和の青春

54

文学賞についての雑感

60

スキー自慢

66

「病院では死にたくない」会

71

位牌の話

76

III

街の眺め

82

IV

受胎告知

98

最後の日々に見た光景——ボッシュと私

106

一枚の暗い絵のこと——古茂田守介のカレイ

111

絵画の言葉

115

犯罪・悪・文学

119

知的スタンダードとしての漱石

123

選んだ本と出会った本と

127

V

佐藤謙三さんの形見	138
中野次郎三郎のこと	143
虚空からひびく笑い——埴谷雄高さんのこと	147
カザを嗅ぐ——水上勉の文学	151
めぐりあい——川村二郎君・丸谷才一君	155
ある老大工の話	161
母の花	168
新装版あとがき	173
初出一覧	174

I

桜

花ふぶき

一年坊主になって、最初に習ったのが、「サイタ サイタ サクラガ サイタ」であった。私は幼稚園にいなかったから（当時はいけない子が多かった）、これが生れて初めて学んだ字であった。

千葉県市川市の私の小学校へは真間川の桜土手をこえて行く。いつせいに花開いたこの土手を通って登校するのは気持ちよかった。私は近所の子と手をつないで、サイタ、サイタ、サイタがサイタと叫びながら学校へいった。

土手の草も萌えはじめ、帰るとこの川のほとりで遊ぶ。真間川は水量は多くないが、淡緑色の水藻をゆすつてきれいな水が流れていた。岸边には土筆、餅草、タンポポ、ハコベ

がふんだんに生えていた。ときおり強い風が吹いて黄塵万丈といった日がある。そんな風の日、土ぼこりとともにいちどきに花の舞い散った光景が、いまでも忘れられないのである。

川に入ってフナとりに夢中になっている子供らの上から、花がいつせいに散りかかった。川面一面に花びらが浮いて、水藻にひっかかりながらゆっくり流れてゆく。まったくそれは豪華といたいようながめであった。あとになって私は謡曲「桜川」の狂女が、網で花びらをすくう風情を見たときも、まずこの光景を思いだしたものである。

しかし今やあの土手もコンクリで覆われ、舗装され、見るかげもない。まことに、去年の花いづくにありや、である。

花のかなしさ

桜の花を思い浮かべていると、甘いやるせないような気分とともに、耳の奥に「春のうららの隅田川」と感傷的な女声合唱がきこえてくる気がする。あるいは「春高樓の花の宴」ときこえてくることもある。そしてなんだかせつないような気持になってくる。

これはたぶん私がこれらの歌をうたった思春期のやるせない気分が思い出されてくるせいであろう。しかしどうもそれだけのためではないかも知れぬと近ごろは思うようになった。というのは、花の歌には案外悲しいもののほうに名歌が多いのである。

雪月花というくらいだから、勅撰集以来さくらをよんだ歌は無数にあるが、のんびりと花の盛りをたたえた歌はむしろ少ない。

見渡せば柳桜をこきませて都ぞ春の錦なりける

素性法師

これなぞのんびり型の代表だが、あつけらかんとしているだけだ。これにたいし、たとえば平忠度が都落ちするとき俊成に託した故郷の花の歌など、悲痛な背景とともに人の心をうつものがある。

さざ浪や志賀の都はあれにしを昔ながらの山ざくらかな

平家物語の中でもこのエピソードが一番美しい部分だが、舞台といい歌といい、こういうのが日本人には好まれてきたのである。ひとかけらの悲哀があつて初めて花がうまれる

のである。忠度の歌は俊成の編んだ千載集に、詠人知らずとしてのっている。

西行桜

謡曲「西行桜」は、西行庵に花見にでかけた人が花の精としての西行に出会う物語だが、これを見ても昔から花といえばまず西行が思いだされたのだろう。事実『山家集』を見て、も西行の花に寄せる思いにはただならぬものが感じられる。花ときけば気もそぞろに魂があこがれ出ていってしまうような按配である。

吉野山こずゑの花を見し日より心は身にもそはずなりけり

花みればそのいはれとはなけれども心のうちぞくるしかりける

古来、桜をよんだ歌が無数にあるなかで、これほど純粹に花にあこがれた歌はないのではないか。そのさまはほとんど物狂いと言ってもいいようである。

このもとの花にこよひはうづもれてあかぬこずゑをおもひあかさむ

花にそむころのいかでのこりけむ捨てはててきと思ふ我身に

西行は世捨人だから、飛花落葉に無常迅速を思う気配があるのは当然だが、本当の世捨人ならこういう花への未練はうたわないだろう。世を捨てながら捨てきれぬ、人間くさい詩心の動きがこれらの歌から見てとれる。それがまた西行が昔から愛されてきた理由であろう。どれも純美といたいくらい美しい花である。死すべき人間の目に見えた花である。「げにやすててだに、此世の外はなきものを、いつくか終のすみかなる」と、謡曲「西行桜」はこの詩人の心を歌っている。

富士ざくら

数年前の冬、私の属する大学の山岳部学生が富士山頂で遭難、二名が死亡した。山岳部長として私は富士吉田の対策本部につめていたが、OBたちの決死的作業にもかかわらずついに救出できなかった。遺体を山頂からおろせたのは三月も末になってであった。

ひなびた火葬場で骨にしたが、完全凍結した遺体は焼けるのに時間がかかり、三時間ほどかかった。ちょうど火葬場の桜が満開で、私は花の下にねころんで待った。そのときに見た花が忘れられない。

中ぶりの数本のソメイヨシノと、薄紅の可憐な花を垂らした富士ざくらが咲き誇っていて、枝ごしに残雪をキラッと光らせた青黒い富士がのぞけていた。空の青を背景に花はかがやくばかり映え、ときおり一片二片の花びらが舞った。若い者の非業の死と、かわらぬ花の盛りとの対照が、ひどく無残に思われ、死んだ者がかわいそうでならなかった。

仏にはさくらの花をたてまつれわがのちのよを人とぶらはば

西行の花の歌がいくつか頭に浮かんだが、かれらが若く死んだという事実の前には、歌ではどうしようもなかった。二人とも私のよく知っている学生であった。西行はつねに死を意識して花を詠んだことがよくわかった。目の前の富士ざくらは、垂らした枝先に伏し目がちの小さな花をつけ、楚々といった風情であった。私がこの花を見たのはこれが初めてで、だから富士ざくらを見ればかれらを思い出す。

鎌倉の花

大学を出て鎌倉に下宿していた時分、通勤のたびに、車窓近くに見た円覚寺の桜が忘れられない。たった一本なのだが、満山の緑の中でその薄紅の花が実に美しかった。私が桜花を美しいと思つたのは、それが初めてのようないだ。

のちに実朝を調べていて、『吾妻鏡』に「晩頭、將軍家桜花をみんながため永福寺に御出、御台所御同車」などという記事を発見したときは、だからひどくなつかしい気がした。実朝の妻は京の公卿の娘だから、その影響で花見を始めたのかもしれない。ともかく実朝は京文化の模倣に熱心で、長沼宗政などという荒くれ武者に、「当代は歌鞠をもつて業となし、武芸は廃るるに似たり」と、その軟弱ぶりを憤られたくらいなのである。

しかし私は当時鎌倉にはこれといった桜の名所はなかったような気がしてならない。金槐和歌集には桜の歌がいくつものっているが、どれも京文化人のまねをして詠んだような題詠ばかりで、ろくなのがないのである。

春ふかみ花散かかる山の井はふるき清水に蛙鳴くなり

これなぞいいほうだが、実朝の名歌の丈高さにくらべたら言うほどのことはない。だからおそらく土着の鎌倉には当時まだ花見の習慣はなくて、歌はよめても、これという花所はなかったと思うのである。花というのは文化の産物だから、人が長年かかって育成しなければ名所はできないのだ。こんなところにも京文化の輸入に熱心すぎた將軍の悲劇の一端がうかがえるかもしれない。

花下遊楽

無常感のまったくない、ただもう花を楽しみ花に浮かれる花見は、やはり桃山だという気がする。いい按配に当時の花見の模様が、「吉野の花見」「花下遊楽」図などの華麗な風俗画に残されている。桃山時代のあの派手な衣装をまとった人びとが、咲き誇る花の下で遊樂するさまがつぶさに描かれているのである。当時の民衆の底抜けに生を謳歌する気分が、画面から伝わってくるようである。

「さてもさても目出度御時代かな。我こときの土民まで安樂にさかへ、美しきこと共を見聞きする事の有難さよ」と、『慶長見聞集』に記されたとおりの樂しげな姿である。

金銀泥地に描かれた桜の花も美しい。「月次風俗画」の描く枝垂桜のみごとさなぞ、ため息がでるほどである。桜というものが画面に真正面からとりあげられたのもこれが初めてではあるまいか。「醍醐の花見」というのもあつて、これは慶長三年三月十五日秀吉が催した盛大な花見の記録だが、妻妾にともなわれた秀吉のおいほれ姿には権力者の晩年の老醜があらわれていて面白い。

しかしやはりこういう底抜けの享樂は文学にはなりにくいと見えて、桃山期には絵画に匹敵する歌も俳諧も見当らない。やむをえずここは少し時代を下つて、芭蕉に出てもらうしかなからう。

木のもとに汁も鱧も桜かな

元禄三年伊賀上野での吟。花見の座一面に落花の舞い散る景色である。